



本校は、令和 8 年度に創立 80 周年を迎えます

〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町4-219

TEL 048-641-0459

FAX 048-645-4584

E-mail sakuragi-j@saitama-city.ed.jp

「塩と色鉛筆と、心のやり取り」 ～貸し借りに宿る、記憶と信頼のかたち～

校 長 森角 由希子

秋の風が心地よくなってきました。季節の移ろいとともに、人とのつながりについて、ふと思いつくことがあります。

私が5～6歳の頃、ある日の夕方、台所で調理をしていた母が「隣から塩を借りてきてほしい」と私におつかいを頼みました。昔は、夜に塩を買いに行くことは縁起が悪いとされていたそうです。塩は浄化の象徴であり、夜の「陰の気」と相性が悪いと考えられていたからかもしれません。私は隣の家に向かい、事情を話すと、隣人は当たり前のように塩を貸してくれました。そのやり取りは、何気ないようでいて、心が温くなるものでした。

塩を借りるという行為は、昔からご近所との信頼関係の象徴でした。塩は日常的に使う必需品ですが、わざわざ借りに行くことで、互いに遠慮なく頼れる関係性が築かれます。「借りる」ことには、後日「返す」という約束が含まれ、自然な再交流が生まれます。とくに塩のような小さなものは、気軽に借りやすく、会話のきっかけにもなります。一部の地域では、「塩を借りに来る人は縁を結びに来る人」とも言われていたそうです。

一方で、物の貸し借りには、信頼が伴います。30年以上前の出来事です。私は、小学校4年生のころ、友達の誕生日会でいただいた香り付きの色鉛筆を大切に使っていました。柄も美しく、思い出が詰まった宝物です。ある日、職場で「色鉛筆が足りないのだから貸してほしい」と頼まれ、快く貸し出しました。ところが、戻ってきた緑色の鉛筆は欠けており、貸した本人に尋ねると、また貸しされていたことが判明しました。探してもらいましたが、行方は分からないまま。

私は、安易に自分の大切なものを貸してしまったことを後悔するとともに、幼い頃の記憶にそっと寄り添っていた色鉛筆が、静かに遠ざかってしまったような、寂しさを覚えました。

物の貸し借りは、単なる物のやり取りではなく、心のやり取りでもあります。貸す側には信頼と寛容さが、借りる側には感謝と責任が求められます。そこにこそ、人と人との「縁」が生まれるのではないのでしょうか。

日々の暮らしの中で、誰かに何かを「借りる」ことや「貸す」ことが、ふとした瞬間にあった方もいるかもしれません。そのときに生まれた気持ちややり取りの記憶を、秋の夜長にそっとたどってみることは、きっと心を耕すひとときになるはずです。

